©錦城高校新聞委員会編集室 2024

錦城高校新聞
題字　井口　文章
再刊　第４４６号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室　２０２４
みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：ウクライナバレエ寺田監督取材会
監督のバレエに懸ける思いとは？
二面：『雪の女王』鑑賞レポート！
世界最高峰の演技を生で観た感想は？

“芸術の力”で世界を一つに

寺田監督への取材会参加

ウクライナ国立バレエ日本人監督インタビュー

新聞委員会は２０２３年12月24日(日)、東京国際フォーラムで行われたウクライナ国立バレエ公演と監督取材会に、株式会社ＣＨＩＮＴＡＩ様の招待取材という形で参加させていただいた。今号では、公演の模様や芸術監督を務める寺田宜弘さんへの取材会の様子をお届けする。(編集部・有志共同取材)

高校生記者からの質問に寺田監督が熱く答えてくれた

寺田監督への取材会開催

今回が日本初公演となった、バレエ「雪の女王」。来日公演を協賛する株式会社ＣＨＩＮＴＡＩにより、錦城高校など都内の学校４校が公演に招待された。

公演終了後には錦城高校、吉祥女子高校、三輪田学園中学校・高等学校、都立戸山高校に所属する高校生記者が芸術監督を務める寺田宜弘さんへ質問をする取材会が行われた。プロのメディアの方々も複数おり、本物の大きなカメラが並ぶ部屋には緊張感が漂う。監督への取材は主に、各校の代表が数問ずつ質問を聞く形で行われた。

取材会を通して

寺田監督は以前、テレビ番組で「芸術の力で世界を一つにしたい」と発言していた。それを受けて今回、錦城の記者が寺田監督に、ウクライナの状況が厳しい今だからこそ「芸術の力」が世界に与える影響について考えを伺うと、寺田監督は「戦争はいつか終わります」と初めに力を込めて語る。続けて「芸術をなくすことは民族性を失うことでもあります。芸術の美、ウクライナの美を世界に広めていくためにもこうして公演を行っています」と答えてくれた。

監督が「芸術の力」を強く感じたのは、サイレンが何日も鳴る街で公演を観た時のことだという。そこでは空襲警報が鳴っているにも関わらず、公演中のホールはいつも満席だったそうだ。５歳から20歳までのダンサーが踊っていたという舞台。監督は、サイレンが鳴ってしまうと、ダンサーの子どもたちは皆びっくりして帰ってしまうのではないか、と思っていたと話す。しかし実際に幕が上がると、予想とは異なり舞台で踊るダンサーたちが見えたそうだ。「目がダイヤモンドのように輝いていた」と監督は語る。バレエ公演は「２時間だけでも戦争から離れたり、戦争のことを忘れたりすることができる」存在だという。また「その時から、次の世代に繋げていきたい、ウクライナの芸術を守っていきたい、と心の奥で感じていたのだと思います。とても感動しました」とも教えてくれた。

戦争さえも忘れさせてくれる
美しいバレエ
Photo：瀬戸秀美　写真提供：(株)光藍社

最後に「特にどんな人に見てほしいか」という質問には、「どんな人というよりも、全ての人に見てもらいたいです。そしてウクライナのバレエを世界中の人に知って貰いたいです」と語った。

11歳から、単身ウクライナへ

寺田監督ってどんな人？

２０２２年からウクライナ国立歌劇場のバレエ芸術監督を務める寺田宜弘さん。１９７６年にバレエ教師の両親の元、京都に生まれる。11歳で単身、ウクライナに留学し、日本人初の旧ソ連の国費留学生としてキーウ国立バレエ学校にて学んだ。１９９５年には名門「ウクライナ国立バレエ（旧キエフ・バレエ）」に入団し、ソリスト（主要な役を与えられ、ソロを踊ることができるダンサー）として活躍した。

バレエ団退団後は、２０１２年からはキーウ国立バレエ学校の芸術監督を10年間務める。２０２１年、ウクライナ国立歌劇場のバレエ副芸術監督に就任した。

気さくに取材に答えてくれた

寺田さんは11歳の留学以来、35年にわたってウクライナで暮らしてきたが、昨年２月、ロシアによる軍事侵攻を前に、一時、国外へ避難した。その後９月にウクライナに戻り、２０２２年12月にバレエ芸術監督に就任した。２０２３年ニューズウィーク日本版（米国の週刊誌『Newsweek』の、日本版）の「世界が尊敬する日本人１００」に選出掲載された。また、２０２３年ＮＨＫ紅白歌合戦にも審査員として出演するなど国内でも注目されている。

「人に夢を与えられる職業」

ウクライナとロシアによる戦争が続く中での本公演。記者からダンサーの変化について聞かれると、監督はまずバレエをすることに対して「心が美しくなければいけない」と話す。日本に行きたいという話が挙がった際、必ず成功しようと誓ったそうだ。

寺田監督(左端)も登壇し、拍手が
鳴りやまなかったカーテンコール

公演を行ううえで「団員の心を一つにすること」が大切だと監督は述べる。世界中の人々に向けて「ウクライナは生きている」ということを知らせたかったという寺田監督。ウクライナに支援の手を差し伸べた日本での公演で、ダンサー一人ひとりが感謝の気持ちを込めて踊っていると教えてくれた。

「夢を持ってほしい」

仕事を通してのやりがいを聞かれた監督は、「人に夢を与えられることです」と回答した。そして「それは本当に素晴らしいことで、とても贅沢なことだと感じています」と自身の想いを語ってくれた。

寺田監督は10代の若者に「どんな時もたくさん夢を持って欲しい」とコメントする。自身も若くしてウクライナに渡った寺田監督。夢に向かって毎日練習することの重要性を話した。取材をした高校生記者らは皆、緊張しつつも、監督に取材ができる貴重な機会を逃すまいとはきはきと質問をしていた。

寺田監督に取材して

取材会に参加した都立戸山高校の慶田卓郎さん（２年）は、今までにバレエを見たことはなかったそうだが、実際に『雪の女王』を鑑賞して「出演者の方々の、生の息遣いなどを感じてとても感動しました」と振り返る。取材会の際には、身だしなみを整えて寺田監督に失礼のない態度をとるようにすることを心がけたという慶田さん。寺田監督のお話を聞いて「自分がウクライナのためにできることがないかをもう一度考えようと思います」と熱く話してくれた。

また、監督にインタビューした錦城の橋本明季さん（１Ｄ）は、「寺田監督の『芸術をなくすことは民族性をなくすことでもある』という言葉に深く心を動かされました」と語る。公演を観に行くメンバーで集まり、前々から監督の出演するドキュメンタリーなどを視聴していたという橋本さん。今回の取材では一歩踏み込んだ質問ができたのではないか、と話す。最後に「貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。監督に取材させて頂くという経験を忘れることなく、今後も活動を続けていきたいと思います」とこれからの想いを語った。

「好きなんです、この国と街が」監督とウクライナの今

Photo：瀬戸秀美　写真提供：(株)光藍社

戦火にさらされるウクライナの首都・キーウで、今も観衆を集め続けているウクライナ国立歌劇場。そこでバレエ団の芸術監督を務めるのが寺田宜弘監督である。幼少期からバレエを学び、自身もソリストとして 15 年間このバレエ団で活躍してきた寺田監督。侵攻後、ウクライナ国立バレエでは一時、ダンサーの人数が２０名にまで激減してしまった。しかし、寺田監督は若手のスカウトに尽力し、今では１０９名が在籍して公演を行っている。

2024 年 2 月 25 日に放送された MBS 毎日放送『情熱大陸』で監督の自宅が紹介された。自宅の窓には、2022 年に大きな攻撃があったことをきっかけに補強用のテープが貼られていた。番組では「このテープがはがれることを毎日祈っている」と語った寺田監督。近くの公園にミサイルが落ちてきたこともあったというが、それでも監督はキーウに残り続けている。「好きなんです、この国と街が」。2 月 24 日、ロシアによる攻撃開始からついに 3 年目に入った。この日キーウの劇場で公演されたのは「レクイエム」。寺田監督は番組の最後、次のように語っている。「一日でも早くウクライナに平和が来る日を願って、素晴らしい舞台にしたいと思います」。

演出へのこだわりを語る

寺田監督に直接取材

寺田監督が最もこだわったという
『雪の女王』の「魔法の花園」の色彩豊かな場面
Photo：瀬戸秀美　写真提供：(株)光藍社

取材会終了後、寺田監督にさらに直接お話を伺うことができた。今回私たちが観覧した『雪の女王』は、ウクライナ国民にとって、ロシアの伝統的なバレエ『くるみ割り人形』の代わりとなるような作品で、クリスマスやお正月には必ずと言っていいほど見るなど、非常に大切にしているものだそうだ。寺田監督が考える『雪の女王』の見どころは「ユーモアやバレエの美しさなど、本当のバレエというものをこの２時間の公演で楽しめるところだと思います」とのことだ。

演出でこだわっている場面は一幕の終わりの魔法の花園の場面だという。「衣装や背景がとても色彩豊かなので日本の子にも喜んでもらえると思っています」と語ってくれた。

寺田監督への取材を通して、監督への芸術に対する熱い思いを伺うことができた。

文化を途切れさせない援助を

協賛企業ＣＨＩＮＴＡＩ社長取材

取材会には、今回の公演の協賛企業である株式会社ＣＨＩＮＴＡＩの奥田倫也代表取締役社長が同席しており、お話を伺った。

取材会参加者みんなでポーズ

株式会社ＣＨＩＮＴＡＩは12年前の２０１２年からウクライナ国立バレエの活動への協賛を始めたという。奥田社長はウクライナの状況について一日も早く解決してほしいと話し、「文化を途切れさせない援助を進めていきたいと思っています」と自身の思いを語ってくれた。

奥田社長は、今後も活動を続けていく上で、より多くの人に体験してもらえるよう活動していきたいと話す。昨年の公演では、１００人程しか招待できなかったが、今年の公演ではおよそ５００人の学生を招待することができたという。「まだ触れていない人に素晴らしい芸術を体験してもらって、関心を持ってくれる方々が増えてくれたら嬉しいです」と笑顔を見せた。

思いをのせた魂のパフォーマンス
日本初演 バレエ『雪の女王』を鑑賞

『雪の女王』ストーリー

美しいものは醜く、忌まわしいものは魅力的に映る不思議な鏡が作られ、雪の女王はその鏡を砕き、世界中に散らす。そのころ、幼馴染のゲルダとカイはゲルダの家でパーティーを行っていた。カイは窓の外で光る雪の結晶に気づき近づくと、それは雪の女王の姿になっていく。カイの目と心に何かが刺さり、世界からは色が失われ、心からすべての興味が消えていった。雪の女王はカイの心を操り、２人はどこかへ消えていく。ゲルダは２人を探しに出る。魔法の花園に行ったり、王宮に使える延臣に招かれ、王宮に連れて行ってもらったり、山賊に遭遇したりしながらもゲルダはついに雪の女王のもとへとたどり着く。

雪の女王が支配する雪の王国は、激しい吹雪に包まれている。雪の女王はカイをこのまま雪の王国に閉じ込めようとしていた。氷の宮殿ではカイを雪の王国の王子にするための戴冠式が始まる。そこにゲルダが現れ、雪の女王にカイを返すように頼むが拒絶される。ゲルダは雪の女王に戦いを挑むが、雪の女王の力は強く及ばない。ゲルダの瞳から涙が零れ、カイの胸に落ちる。その時、カイの胸から鏡の破片が抜け、カイの心には温かさが戻る。２人の愛の力で氷の宮殿は溶け、雪の女王は去っていく。２人は固く抱きしめあって物語の幕は閉じる…。（参照：公演プログラム）

一糸乱れぬ踊りで観客をとりこにする
Photo：瀬戸秀美　写真提供：(株)光藍社

『雪の女王』日本初演への道

『雪の女王』は２０１６年にウクライナ国立バレエの実験的なプロジェクトとしてアンデルセン童話をもとにして作られた。同年６月３日に、ウクライナ国立歌劇場で初演が行われると『雪の女王』は家族で楽しめるバレエ作品としてウクライナで人気を博した。ウクライナ国立バレエでは主にクリスマスからお正月のシーズンに上演されてきた。

しかし２０２２年、ロシアによるウクライナ侵攻の影響でロシア人作曲家のチャイコフスキーなどの曲が使用できなくなり、作中で使用された音楽の大幅な改訂を行った。そして、同年12月23日に改訂版『雪の女王』が初演された。また、２０２３年から２０２４年にかけて行われた日本公演にて、『雪の女王』が日本で初めて披露された。

「芸術の持つ力の大きさを知りました」

今回の公演に有志メンバーとして同行したのは、加納奈央さん（２A）、山﨑みくりさん（２D）、須郷さくらさん（２F）、山竹みれさん（２I）、神田晄星さん（２J）、岩田桧菜子さん（２L）の６人。舞台終了後、それぞれに鑑賞を終えての思いを語ってもらった。

今回の有志メンバーには、バレエを習っていた経験から興味を持ったという参加者がいた。経験者ならではの視点で感じ取ったことも多くあったようだ。大人数での踊りがピッタリと揃った時や、男性と女性が一緒に踊る「パ・ド・ドゥ」の美しさに感動したと話すのは、バレエ経験者の山﨑さん。「今回の公演を通して、芸術は人の心を動かすと改めて感じました。たくさんの人に見てほしいと心から思いました」と思いを語った。

また、今回の舞台を「宝石のように美しい舞台」と表現した人もいた。「華やかで美しい、この世のものとは思えないような世界」を舞台の中に感じたと話す岩田さんだ。「舞台全体からダンサーの指先に至るまで、全てが至高の公演でした。自国の情勢が不安定な中公演の準備をするのは大変だったはずなのにそれを全く感じさせない舞台から、人の強さと芸術の持つ力の大きさを知ることができました」と語ってくれた。

「バレエ団の方々に勇気づけられました」

ウクライナの現在の状況に思いを馳せながら、バレエを鑑賞した人もいたようだ。須郷さんは、寺田監督の「バレエ団員の中には家族を失ってしまった人もいる」という話を受けて、それでもバレエをしたい、披露したいという強い意志で踊ってくれたことを知ったと話す。「そんなウクライナ国立バレエの方々の意思に勇気づけられました」と舞台を振り返った。

また加納さんも、過酷な国際情勢下にいるにもかかわらず、その背景を感じさせないダンサーたちの情熱のこもった踊りに感動したという。「一つ一つのパフォーマンスの磨き上げられた美しさを見ることができて、とても良い機会だったと思います」と話してくれた。

終演直後に感想を語り合う

もともとバレエにはあまり興味がなかったという神田さんは、自分たちと同じくらいの年齢のダンサーも舞台で踊っているということに感じるものがあったそうだ。「現在のウクライナ情勢下にあっても、ダンサーの方々が自分たちの好きな芸術をみんなにもっと好きになってもらいたいという真摯な思いでパフォーマンスをしてくれていて、自分ももっと頑張らないといけないと思わされました」と感銘を受けた様子だった。

本公演では、ウクライナ国立バレエの思いが詰まったパフォーマンスを観ることができ、大変貴重な経験となった。

「プロの踊りに感嘆しました」有志記者語る

有志記者として、今回のバレエ公演を鑑賞した山竹さんは、以前バレエを習っていたそうだ。山竹さんはバレエの魅力として、まずなめらかで美しい動きを挙げ、その上で「私がバレエをはじめた理由は衣装なので、きれいな衣装を見たり、着たりすると、この曲をやりたいというモチベーションに繋がります」と話す。そんな山竹さんは、公演で「ダンサーさんたちのプロ意識の高さ」を特に感じたという。「ウクライナ侵攻下で練習も大変な中であるにも関わらず、メインの踊り手ではない方々も手足の先まで美しい踊りで、本当に感嘆しました」と話してくれた。

凄いと感じた点として主役だけでなく、端役の人、群舞の人全員が指の先まで、集中していて、美しく伸びていたことを挙げる。その中でも特に「主役が踊っているときに横で待っている人は、疲れたり気が散ったりすると思うのですが、そんな中でも集中していて、プロはやはりすごいなと思いました」と公演を振り返ってくれた。（瑞・紫）

来場者インタビュー「公演してくれてありがとう」

プロジェクションマッピングの大胆な演出、豪華絢爛な衣装と艶やかな踊りに魅了されたひと時だった。
Photo：瀬戸秀美　写真提供：(株)光藍社

今回、許可を得て一般の来場者にも感想を伺うことが出来た。千葉県から来た親子に聞くと、自身もバレエを習っているという娘さんは「山賊の踊りが楽しそうですごかったです」と笑顔で答えた。お父さんは「生演奏がとても心地よく、良い機会でした。鏡を作る演出がかっこよかったです」と振り返ってくれた。

今回の公演ではプロジェクションマッピングを用いたダイナミックな演出で、『雪の女王』の臨場感が伝えられた。観劇中はオーケストラの生演奏が踊りを彩り、時折ホールの左右から吹雪く音声がまるで劇の中に取り込まれたような錯覚に陥らせた。

都内から公演を観に来たという中学生三人は、学校で配布されたチラシで公演を知ったという。プロによる公演を見るのは初めてだったという二人は、事前にビデオを見て予習をしたそうで「衣装や大道具、生演奏の迫力が凄かったです。ダンサーの手の動きがなめらかでとても綺麗でした」と興奮をあらわにした。

また、今もバレエを続けているというもう一人は昨年の『ドン・キホーテ』日本公演も鑑賞したそうだ。「前回の公演よりもカーテンコールで舞台に出てくる人数が増えていました。この大変な時期にわざわざ日本まで来て公演をしてくれるのは、とてもありがたいことだと思います」と会場で販売されていたチャリティートートバッグを手に語ってくれた。

ウクライナ国立バレエの歴史を辿る

ウクライナ国立バレエは1897年にバレエ団がキーウに結成されたのが始まりである。当初は幕間の余興として踊っていたそうだ。

1925年ソ連の芸術振興の一環としてキーウ州立劇場が再編成されたのを契機に、1926年に『キエフ・バレエ』が新発足する。第２次世界大戦時には、キーウ州立劇場は閉鎖を余儀なくされ、バレエ団員も疎開することとなった。終戦後、活動を再開すると、1964年に『クラシック・ダンス国際大会』に出場し、『L’Etoile d’ Or』という賞を受賞した。この結果、『キエフ・バレエ』はアメリカ、アジアでも人気を博すようになった。1992年にはキーウ州立劇場が『シェフチェンコ記念ウクライナ国立オペラ・バレエ・アカデミー劇場』と改称され『キエフ・バレエ』はウクライナを代表するバレエ団となる。

厳しい状況下でも活動を続けている

しかし、2022年２月、ロシアによるウクライナ侵攻が始まると、劇場は閉鎖を余儀なくされた。海外に避難する団員も多くいたそうだが、劇場が再開されると小規模公演を再開するようになった。現在では、名称を『ウクライナ国立バレエ』に変更し、海外バレエ団の協力やバレエファンから寄せられた義援金なども使用しながら活動を続けている。

（ウクライナ国立バレエ公演プログラム参照）　（蘭）

小平でも会えるウクライナ
ウクライナ避難民運営食堂Ｎａｄｉｙａ

２０２３年９月15日発行の錦城高校新聞４２６号にて、錦城の地元小平市にあるシェアキッチンで営業するウクライナ避難民食堂『Ｎａｄｉｙａ』に伺った。

『Ｎａｄｉｙａ』では、３人のウクライナ避難民の方が働いている（当時）。そのうちの一人ナターシャさんに、ロシアのウクライナ侵攻に対する思いを聞くと「ウクライナ人ではありますが、ロシアに住んでいたこともありますし、ウクライナとロシアは食をはじめとする様々な文化が似ているので、難しい質問ですね」と答えてくれた。店内にはナターシャさんらが用意したロシア土産のマトリョーシカなどが飾られており、ロシア文化も感じることができた。

マトリョーシカを手に笑顔で語る

『Ｎａｄｉｙａ』では、日本人スタッフとして、別當紀人さんが働いている。別當さんは、10年前に知り合っていたエリザベータさんの避難を支援するために身元保証人となった。そして、日本語を話すことが難しい彼女らウクライナ避難民のために営業を始めたそうだ。

私たち編集委員はＮａｄｉｙａセットを頂いた。このセットにはボルシチ、パンまたはおにぎり、サラダ、ヴァレーニキ（２個）、ウクライナ名産のはちみつを使用した紅茶がついてくる。初めて食べたボルシチは体が温まる感じがして、美味しかった。また、水餃子のようなヴァレーニキにはジャガイモとブルーベリーの２種類の味があり、編集委員はブルーベリーが入っているものを頂いた。中にブルーベリーが詰まっていて、その上からブルーベリーソースがかかっており、強くブルーベリーを味わうことができた。美味しいウクライナ料理を堪能しながら、ウクライナ避難民の方の今も知ることができる『Ｎａｄｉｙａ』に足を運んでみよう。

ウクライナ避難民運営食堂Ｎａｄｉｙａ　営業日 毎週月・火・土曜11時～14時30分

編集後記

今回の取材会では、一人の記者として監督に取材させていただくのみならず、逆に私が新聞社の記者さんから取材を受けるという珍しい機会を頂くこともできました。不安や緊張も多い中、とても実りある一日となりました。

公演中では、暗い客席から見える「雪の女王」の白い衣装が、回転と同時にふわりと広がった瞬間が印象的です。まぶしいくらいに光を集めたスカート部分が重力に逆らって波打ち、しなやかな手先が伸びた美しさが今も忘れられません。残酷なまでにきれいな、儚い一瞬の感動は、ホールでしか感じられないものだと思います。

今後は、こうした「一瞬」を切り取れる記者になっていきたいと感じました。本号が少しでも現場の感動や動きをお伝えできる紙面になっていればと心から思います。ご家族の間で、クラスメイトとの間でもう一度読み返してみてはいかがでしょうか。（橋本）

＊＊＊

この度は、ウクライナ国立バレエの公演にご招待いただき、また寺田監督への取材もさせていただき、ありがとうございました。私はバレエを見たことがなくて、当日まで舞台の内容を理解することができるかなど、不安でいっぱいでした。しかし、舞台が始まってすぐ、その不安はなくなりました。出演者の方のダンスや表情、オーケストラによる演奏などから、雰囲気が伝わってきました。舞台が終わるころには、もう一度この舞台を見たいと思うほど心が動かされました。人生でめったに経験することができない経験をできたと思います。

素晴らしい公演を見せてくださったウクライナ国立バレエの皆さんや、公演に招待してくださったCHINTAIの皆さん、本当にありがとうございました。（山本）